

EV SIDE by SIDE復活プロジェクト——「君たちの笑顔が見たい」

Project Report 第4回 「ありがとう！ 走りました」

EV サイド・バイ・サイドは日本 EV フェスティバルにお出かけです。お出かけするには、電気自動車とはいえやはりお化粧が必要です。古いステッカーを剥がし、ファンドにご協賛いただいた個人や企業のステッカーを貼るのです。そればかりか、ファンデーションの下地作りに洗剤を使って、ノーズカウルに始まり、ボンネット、サイドボディ、リアカウルなどを磨きに磨きました。

思い出すと、淡路島の雨堤さんの研究所から 7 月に新座市のベッチーガレージに来てから、EV サイド・バイ・サイドは一度も洗車をしてあげていませんでした。それで汚れていることがあたりまえになり、「こんなものか」と思っていたのですが、磨き上げてみると、実にきれいなボディが現れたのです。化粧をした古女房に惚れ直したような気分でした。スタッフもみんな「あれっ」という感じで、EV サイド・バイ・サイドを見つめました。とくに日本 EV フェスティバルで運転を任された堤健一さんは、「これは私のマシンだ」といったように、さっそくコクピットに乗り込み、ハンドルやアクセルペダル、ブレーキペダルの感触を確かめていました。

「うっ、うっ。動かない」。

お化粧も終わってモーターの試運転をすべく、アクセルを踏みましたがモーターはうんともすんともいわないのです。アクセルを何度踏んでもモーターは回りません。コクピットにしっかり居ついた堤さんの顔色が変わり、私の顔を「ど、どうしましょう？」と見上げました。

「そんなこと言われたって…」と思い、周囲のスタッフを見回すと、丹羽さんも、森先生も、菱沼先生も、生徒さんたちも、両手を広げて手のひらを返すアメリカ人がよくする「どうしようもないぜ」を示すあのポーズで、堤さんを見下ろしました。

ガレージの外には EV サイド・バイ・サイドを日本 EV フェスティバルの会場である筑波サーキット・コース 1000 に運ぶべく、大きなローダーがすでに来ていました。日はどっぷりと暮れ、あたりは寝静まり、猫も犬も小屋に帰り、秋の澄みきった夜空に満天の星が輝き、あたりには人っ子一人いません（ウソです）。

しかし、ベッチーさんはこれから岡山に行かなければならず、その前に EV サイド・バイ・サイドをローダーに積み込んでおかなければならなかったのはホントです。

コンピューターがらみのトラブルでは、いったんすべてのスイッチを切り、最初からやり直すと、だいたい修復できるものです。ということで、EV サイド・バイ・サイドも何も騒ぐことはな

く、あっというまに修復でき、モーターは元気よく回りました。

ローダーに積まれたと思っていた EV サイド・バイ・サイドは、なんとも立派なコンテナに積み替えられて日本 EV フェスティバルの会場に前日の土曜日、11 月 2 日の夕刻に着きました。EV フェスティバルの準備に追われていたスタッフ全員で出迎えました。コンテナの左右の大きな扉がテスラ X の両ドアのように開くと、水色のボディの EV サイド・バイ・サイドが現れました。

その後方にはベッチー製作の小さな Kids ERK がちょこんと鎮座していました。EV サイド・バイ・サイドと Kids ERK は、これからの日本 EV クラブの活動の両輪となるに違いありません。

翌 11 月 3 日。朝 8 時 45 分に第 25 回の日本 EV フェスティバルが開幕しました。EV サイド・バイ・サイドは、テント村の先頭に設けられた青色のテントに置かれ、同乗試乗の始まりを待ちました。その間にたくさんの参加者と見学者からたくさんの質問を受けました。

EV サイド・バイ・サイドは、やはり子供達に大人気でした。まだ EV サイド・バイ・サイドを運転できない子供たちも、隣に陳列された Kids ERK であれば、組み立てて運転できます。子供たちは未来の夢を EV サイド・バイ・サイドに、すぐそばの夢を Kids ERK に見たのではないのでしょうか。

11 時 45 分。いよいよ EV サイド・バイ・サイドの試走です。最初同乗試乗者は中川原隆さんです。ヘルメットをかぶりニコニコしてコクピットに滑り込みましたが、それもつかの間、EV サイド・バイ・サイドが走り出すと、その顔は半分ニコニコ、半分ゆがみだしました。で、EV サイド・バイ・サイドを降り、MC の秋元さんから感想を聞かれる頃には、目はうるんで、宙を見つめ、口からは涎が垂れてというのは、全部冗談ですが、夢中になって乗り心地の良かったこと、EV サイド・バイ・サイドは飛ぶように走ったことを語っていました。

二番手は中川原さんの同行者の坂上優太さん。もう最初からニコニコで顔は崩れっぱなし。1 周目はコースのインフィールドには入らず、その代わり裏の直線をアクセル全開で走ります。見ても怖いほどのスピードです。2 周目は右に左にカーブの連なるインフィールド。坂上優太さんは、3 週の試乗が終わるまで、カーブでは首を内側に傾けて横 G に必死に耐えていました。

三番手は前田哲男さん。MC のインタビューに答えて、人生で最高の経験でしたとおっしゃっていました。嬉しさを通り越して、深い感動の中で試乗体験を噛みしめているようでした。

四番手は中村さつきさんです。実は中村さつきさんは EV サイド・バイ・サイドの電池の提供者なのです。さつきさんなくして EV サイド・バイ・サイドの復活はあり得ず、子供達の笑顔も見られなかったのです。しかし、電池をご提供いただくまでには、涙なくして語れぬ山のようなドラマがありました。EV サイド・バイ・サイドの復活がさつきさんの心を温かく包んでくれると嬉しいのです。

さつきさんは、日本 EV フェスティバルのオーナーズ・タイムアタックに出場し、ご自分のリフで 1 分 6 秒という十分に速いタイムで走りましたから、なかなかのドライビング・テクニッ

ク持ち主なのですが、試乗後のインタビューで、「私はレーシングドライバーには向かないことがよくわかりました。だってものすごく速いんだから！」といわせるほどに EV サイド・バイ・サイドは速かったようです。

しかし、負けず嫌いな中村さつきさんは、「今度は運転します」と口を真一文字にぎゅっと結んで決意を見せました。もし、そうなれば二人乗りの EV フォーミュラーを運転する世界最初の女性ドライバーになるはずです。

ドライバーは現役レーシングドライバーの堤健一さんでした。堤さんは夏の暑さの中、びっしょり汗をかきながら EV サイド・バイ・サイドの修復作業をした復活劇になくはならぬスタッフです。ちなみにラップタイムは 45 秒前後でした。これは試乗会の前に行われた ERK30 分耐久レースの最速タイムに迫り、FJ1600 というエンジン・フォーミュラーカーのラップタイムとほぼ同じです。EV サイド・バイ・サイドはレーシングカーとしても一級の速さを示しました。電気フォーミュラーカーは速いです。

ということで、EV サイド・バイ・サイドは 2019 年 4 月から 7 カ月をかけて無事に復活し、お約束の日本 EV フェスティバルでの同乗試乗を行うことができました。ファンドに献金していただいた個人の皆さん。そして企業の皆さんに改めてお礼を申し上げたいと思います。これからたくさんの子供たちを乗せて、自動車の未来に希望を持ってもらおうと思っています。

さっそくですが、11 月 23 日に筑波サーキット内のオーバルコース(1 周 500m)で試乗会を行います。見学は自由（無料）です。また、同乗試乗をご希望の方は、事務局までご連絡ください。まだシートに空きがあります。

その後、栃木県栃木市の郊外にあるカートコースのフェスティカで、11 月 24 日にデモランを行います。ご見学をご希望の方は事務局までご連絡ください。ちなみに、この日には ERK（電気レーシングカート）のレースが行われます。

学校や施設で子供達を乗せてあげたい。組立と試乗を組み合わせた社内研修に使いたい。お店に展示したいといったご希望も事務局にお寄せください。2 月には山形県で 1.5 メートルも積もった雪の中を走ろうと思っています。走れるかどうか自信はありませんが、雪を巻き上げて走ったら、きっと子供たちは世界一の笑顔を見せてくれるに違いありません。その笑顔を楽しみにがんばります。

ご協賛をありがとうございました。

2019年11月7日

一般社団法人日本 EV クラブ
代表理事 館内端



中川原隆さん。



上坂優太さん。



前田哲男さん。



中村さつきさん。

